

これは「長閑さ」の具象化として、のんびり対坐する主客を描いたもの。淡彩です。これに対して、次のものは俳諧ぶり。

茶を飲めば鐵貸^{てつ}す家や木瓜^{ぼけ}の花 葉

腰は曲れど心は直なる主の翁が、いとまめだちて勤むる茶菓も、都人には如何ならむ

手には取れども食へぬ草餅 波

笑いの中にたしかな生活の背景があつて、単なる頭のお遊びとはいへません。ちなみに、私はこの付句と前書きの作者を巖谷小波として引いていますが、この部分の筆者は大江小波とあります。小波の最初期の号の一つが大江小波だったのです。この、のちの大児童文学作家も、別号をいくつか作っていました。

私がここで長々と紹介した「雑録」欄のようなものの中に、実は近代文学草創期の、いわば無造作に創作意欲を発散するという一般的な生き方の、好例があつたと私は思います。紅葉はその中心にいる主宰者だったのです。

3

尾崎紅葉は山田美妙、石橋思案、丸岡九華らと共に、明治十八年、大学予備門二年の時に硯友社を結成しました。近代日本最初の純文学結社といわれるもので、同年機関誌「我楽多文庫」を回覧本の形で創刊しました。

一方、学歴についていえば、東大法科へ入学後和文学科へ転科しますが、学年試験に二度落第をくり返し、二十三年

七月退学します。しかしすでに文名は高く、大学中退の半年以上前に読売新聞社に入社していました。

同じ年、彼は巖谷小波や川上眉山と共に俳句結社「紫吟社^{むらさきぎんしゃ}」を興しました。もともとは同年六月創刊の硯友社の機関雑誌「江戸紫」にちなんだ結成された詩歌結社でした。紅葉は二十代半ばにも達しないうちから、すでに小説のみならず、新派俳句運動の指導者でもあつたのです。

その点で、彼は同じころ俳句によりやく熱を入れはじめていたもう一人の近代俳句の開拓者・指導者正岡子規と、完全に同一歩調をとりつつ、新派俳句の先導者の位置に立っていたのです。従って互いのライヴァル意識も強かったでしょう。特に子規において。彼には、紅葉の句が非写生句なるがゆえに（小説ではみごとにそれを達成しているのに）まだ悟っていないらしい、と批判した文章もあります。（「棒三昧」、明二十八・十二）

子規は明治二十五年に日本派を興しました。一方、紅葉も二十八年秋声会を興し、翌年機関誌「秋の声」（十号で終刊）を刊行するというように、小説家の余技程度ではなく、本格的な熱意をもって俳諧文学の芸術化にうちこみました。

彼の俳句運動が子規の日本派のような大成功に至らなかった理由については、いくつかのことが考えられます。第一には、彼が小説家としていち早く余りにも華々しい成功をおさめたため、俳句宗匠たるに必要な時間を十分とれなくなってきたこと、第二には、彼の進もうとする俳句の方向が、いわば彫心鏤骨、一字一句のうちにあまたの趣向を凝らし、しかも決して重苦しく鈍重なものにはならないよう精神はたえず緊張感にみちた飛躍を心がけ、つねに奇想天外に遊ぶ俳諧精神を保ちつづけるという方向にあつたため、苦吟も当然の道へと進んでいったこと、第三に、言うまでもなく、胃癌によるあまりにも早い死にいたるまでの彼の人生の、まったく超特急というしかない忙しさ、そして挫折といった理由がまずあげられます。

子規は満三十五を迎える直前に死に、紅葉もまた、満三十五歳と九か月で死にました。ほとんど同じ年齢で二人とも

世を去ったわけですが、その短い人生において彼らがなしたことのうち、事を俳句に限った場合、子規の成しとげたものの巨大さに比して、紅葉のそれはあまり分明でないように思われるのはなぜか、それについての私の考えを申しのべる必要があります。

子規が成しとげた短詩型文学の革新運動は、その後百年間にわたって、日本の俳句・短歌界に、言葉では尽くせないほどの深く大きい影響を与えてきましたが、きわめて根本的かつ単純な言い方でその革新運動成功の理由を要約するならば、とくに俳句においては、彼が「写生説」を唱えたところにすべての成功の原動力がありました。彼の写生説は、さらにそれを受けついだ高浜虚子の活躍によって、千古不滅の俳句作法の域にまで高められ、近代俳句の大道となりました。

虚子の写生主義が広く受け入れられたのは、いわば南無阿弥陀仏と同じように単純で、余計な理屈を必要としない説だったからでした。なぜと云って、写生そのものに余計な理屈はいらないからです。

写生さるべき自然は、永遠に古くして新しい素材であり、写生に究極の終点はなく、ゆきついた地点からまた新たに、追求すべき自然の姿が、さらに様相を深めて前方にひろがるのです。その意味では、写生の道に終りはありません。出発点の単純さと、到達目標の涯しなさとの両面において、「写生主義」というものは、どのようにでも追求され、変貌しうるすばらしい指針となりました。

虚子がくり返し説いている「写生主義」の要点をちよつと引用しておきましょう。

「私は多年写生といふことを強調してゐます。此写生といふ上には無論客観の二字を冠すべきであります。之は主として客観写生の技をゆるがせにすべからざることを痛感してのことであります。繰り返して申しますが、写生の技であります。思想の方向は一切拘束しないのであります。如何なる感じを以て自然に對しやうが其点は全く無拘束であります。

す。或者は冷かな感じを以て自然に對する、或者は暖き情を以て自然に對する、或者者は楽しんで自然に對する、或者者は悲んで自然に對する、或者者は肯定の目を以て人生に對する、或者者は懷疑の目を以て人生に對する、或者者は親愛の情を以て人生に對する、或者者は嫌惡の情を以て人生に對する、或者者は怪力乱神を説き、或者者は凡庸の生活を描く、すべて其等は拘束しないのであります。只写生の技を重視するのであります。」「(写生といふこと)、昭四・一、福岡に於ける関西俳句大会席上講演)

考えれば考えるほど、人を吸引する力のあるのが「写生」という教えでした。技の鍛錬でのみ作者を拘束し、あとは何をしようと、何を考えようと自由。根柢には思想上の自然主義があり、その上に立つて、「技」、言いかえれば「美の追求」への無限の向上意欲があつたのです。両々相まって、実に日本人の好みに合っていた運動こそ、写生主義だったのです。それが龐大な追隨者をもち、現在でも、虚子の直接の門流ではない俳人にあつてさえ、「写生」はまず遵奉すべき大道であると大多数が認めているのは、当然なのです。「写生」とはすなわち、「俳句大衆化」の、これまでのところ唯一の、正しい大方針だったのです。

そしてまた、実際のところ、俳句は明治二十年代のころ、もし子規が「写生」という宝の鍵を見つけなかったとしたら、到底今日の盛況を招くことはできなかったでしょう。

その理由の第一は、もちろん、氣息えんえんの旧派の月並俳句では、人々の関心をひき、優れた次代の俳人を出現させることもありえなかつたはずだからです。

その理由の第二は……これについては章を改めて書かねばなりません。

本書所収の紅葉の「俳談」の一篇に「革命の句作」(明三十一・一「太陽」第四卷第一号)という文章があります。俳句革新をめざす紅葉の意図が鮮明に現れている文章です。

「近來書生流ともいふべき無作法の俳句流行を極めて」おり、「滅亡の兆はおろか也、既に俳諧墮地獄の阿鼻叫喚、前代未聞の曲事たり」という前置きの後、芭蕉以後二百年の俳諧は「古池の水を腐らして鼻持ならず」と一刀両断し、次のように書いています。

「……か、れば正風と称ふるものに今日の滅亡あるは深く怪むに足らざるなり、之を済はむとは革命の大乱を起すの外無し、今や後進血氣の輩此大志を抱きて起るに似たり、さるほどに其俳たるや或は無法破格なりと雖も、這裏明かに一派の活気ありて、真を捉へむと力むる所、彼先進が株を守りて逸に睡れるの比にあらず、但氣を使ひて憤まざるが故に、姿調の整はざるはなか／＼談林末期の乱れに過ぎたりと雖も、その内容の新しいに至りては、決して彼と轍を同うするものにあらざるや疑無し、之を革命の血とは謂ふなり、然れども如此き暴排は固より長きを保つべきにあらず、乱久しければ治を思ふの理、天地曾て文章の声を断絶せず、やがて第二の芭蕉生れて俳風婦一の時節は来りぬべし、とにかくにも弥勒の世に出でむ迄は、各力の限り新意を出さむと心掛けて、破格無法を後顧するなく、言はむと欲する所を言ひ、行はむと欲する所を行ふに如かず、但衷に道の誠を存せむことを忘るべからず、しかれば殺傷すといども無名の師にあらざるを、神仏もなど容し給はざらむや、憂ふるなかれ俳諧全滅の今日は、則ち俳諧復興の明日あるべき前一日なり、豈大いに乱さずして可ならむや、

踊れ／＼踊らぬ奴は腰拔よ」

正岡子規や高浜虚子が沈着冷静な自然主義者の俳諧版だとすれば、尾崎紅葉は明らかに、熱血横溢の浪漫主義者の俳諧版だったといえるでしょう。「俳句大衆」を引率する指導者として、どちらがより適任だったか、問うまでもないことです。

紅葉の道は、いわば俳句という極小の詩型の中で、できるだけ複雑な趣向を構えることも恐れず、「道の誠」を高々と掲げつつ、「各力の限り新意を出さむと心掛けて、破格無法を後顧するなく」、俳諧復興の明日を信じて進もうということでした。

つまり、紅葉の目指していたのは、今日ではすでに陳腐な用語になってしまった観さえありますが、当時における、正真正銘の「前衛俳句」だったのです。

子規一派に対して紅葉一派の方が「古い」と漠然と考えている人が多いと思いますが、実態はそんなに単純なことではありませんでした。そのことは、同じく本書所収の彼の俳諧への熱情を一息に吐露した短文、「俳諧嚼鉄」(初出「国民之友」、明三十・八)を読んでも明白でしょう。

この文章ならびにそれに続いて彼が掲げている俳句十九句については、私は「われ俳諧において鉄を嚼む——尾崎紅葉の俳句」(図書、平六・二)という拙文で取りあげ、その「通常の生活感覚ならざるところに文学的想像世界を築きあげようとする旺盛な意欲」、「屈辱として同時に軽妙な魅力をそなえている文体」について書きました。

いずれにせよ、空想と現実の自在に混じり合ったような紅葉の不思議な句の世界は、彼が「俳諧嚼鉄」の中で、多少の誇張をまじえて言っているところによれば、「吟髭を拈断して血を出し、前後を忘れて喝すれば、声釣棚の落つるやうに響きて、みづからは心地囊の裂けたるかと思ゆるほどに、熱氣夥しく口中を迸り出で、」という具合の、まさに「苦吟」そのものから生まれていたのです。

紅葉に才能が乏しかったわけでは全くありません。五七五の句をひねる位、彼にとつてはまさに鼻唄まじりだったでしょう。それを敢てこの苦吟です。そこには当然彼の「革命の句作」という遠大な目標があったのです。

子規の「写生」は、万人誰にでも即座に入門し実行できる大目標でした。そして実際、それは作者の器の大小深浅に応じてどのようになっても変化できる、打出の小槌のような有難い理論でした。俳句形式という短小な形式では、「写生」という、理屈抜きに実践でき、いくらでも底が深くもなりうる理論は、まことに願ってもない指針であったのです。その点では、紅葉には理論といえるほどの理論がなかったと言うべきでしょう。

彼にはいわば、勘や当りという、古来日本の詩歌人たちが最も頼りにしてきた作句法しかなかったのです。この場合、実践を通じて会得するという、自得の方法だけが最も確実な上達法だったわけで、つまり前衛句の作者は同時に、体当りの鍛錬を信じる素朴な体験主義者であり、スマートな理論を編み出すことには興味もなかったのです。新と旧の絶妙なアマルガム、それが俳人紅葉の真骨頂でした。

『紅葉句帳』巻末には、巖谷小波の「俳席に於ける紅葉」という回想文があり、その一節に、紅葉および紅葉一門の俳句修業のさまが活写されています。

「▲(秋声会の俳席の)時刻は大抵午後一時から。その時刻の五分前迄には、子は吃度文台に坐つて居た。で、時刻が来ると直ぐ題を出す、其の題が頗る難題。——初心の者には読み方さへ解らないのを、子は親切丁寧に、一々それを説明してやつた。否、子は例の癖として、艸体の頗る達筆に書くのだから、実に余にさへ、その文字の読めない事もあつた位だ。

▲兎に角紅葉と云ふ人は、楽な道を楽に通るより、苦しい道を苦がつて通るのを、万事に付けて快とする方であるから、一寸した運座の題でも、成るべくむつかしい、人の減多に詠まない、云はゞ難題の作例の無い題ばかりを出し、他

を苦める代りには、自分も一生懸命に苦しんでゐる。

▲随つてその俳句も、決して多きを貪らない。僅に一題一句、時には句作無しに済ます事さへあつた。之に反して余の如きは、少くも平均一題二句以上は出す。巧遅と拙速との関係は、子と余に於て明かに代表して居た。イヤだらしいの句を沢山吐くなアとは、よく子に罵られた事である」

この小波の文章で、「兎に角紅葉と云ふ人は、楽な道を通るより、苦しい道を苦がつて通るのを、万事に付けて快とする方」だったとあるのは、小波が十八歳の時に二十一歳の紅葉に入門し、以来最も信頼される門人であった人だけに、きわめて印象的であり、重味がある言葉です。

子規派の運座はこれと反対で、平易な言葉で印象鮮明に、すばやく、多量に作ることをもって方針としました。「写生」とはまさにそういう行き方をするものです。両者、何とも対照的でしたが、一方が正しく、一方が過つていたわけではありません。「俳句」形式の最も平明な使い方が、子規派の行き方だったのだということを語っているだけです。

紅葉の行き方は、専門俳人——そんな存在がありえたとして、です——の孤高の行き方にほかなりませんでした。俳句の「大衆化」の方向へは、まかり間違つてもいけない行き方でした。

私は両者それぞれが選んだ道を思う時、いささかの感慨なしには居られません。

なぜなら、俳句は、先にもふれたように、明治中葉の時代に、大衆化するか、さもなければ野垂れ死にするかの岐路に立っていたことは明らかだからです。俳句は、結局のところ、子規、ついで虚子が示した「写生」の道をとって進む以外、生きのびることはできなかったのです。

それだけに、その後一世紀を経て、子規・虚子の敷いた路線もすっかり安定的に定着し、楸邨、青畝、誓子といった昭和期最大の巨匠たちも相ついで世を去り、現代俳句によりやく倦怠の気配濃厚となった今、そして前衛俳句の世界で

も大物作者はついに出現しないことが明らかになった今、あらためて近代俳句草創期に、三十五歳で歿した尾崎紅葉が示したまま、途中で断絶してしまった道を顧みみると、その未完の仕事ぶりが、それなりに心に沁みて懐かしく思えてくるのです。

これを単純化して言えば、彼の追求した道は、俳句をその本質というべき無名性、大衆性に敢然とさからってまで、「芸術」として屹立させる方途を探るところにあったと、私は思うのです。

紅葉全集 第九卷

(第9回配本／全12巻・別巻)

一九九四年九月二日 第一刷発行

定価 六二〇〇円(本体六〇一九円)

著者 尾崎紅葉
おさきこうよう

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店

〒100-02 東京都千代田区二ツ橋一五十五
電話 案内 03-5710-8000

ISBN 4-00-091779-X

Printed in Japan